



## 【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

**観点1: 複数形式の形成手段** 方言言間バリエーションを考える際、まず「どんな手段で複数形を作るか」という観点が有効である。ほとんどの方言で、複数形は接辞によって形成されるようであるが、疑問名詞(誰)に関しては接辞ではなく語根の重複で表現される方言もある(表1の北琉球沖永良部島国頭: taru「誰」→ taru-taru「誰たち」)。

**観点2: 名詞の語彙的タイプ** 方言間バリエーションを分析するもう1つの観点は、名詞の語彙的タイプ(代名詞、呼称詞など; 表1の最上段)である。表1からわかるように、同じ方言の中でいくつかの複数標示の手段がある場合、接続する名詞の語彙的タイプで使い分けがある方言が多い。例えば、八丈島三根方言(三樹2018)では、全ての名詞に仕える-raに加え、-raraという複数接辞もあるが、これは2人称及び3人称代名詞、疑問名詞に分布する。

**観点3: 複数性の意味特徴** 同じ語彙的タイプで異なった形式が交替する方言もある。例えば北琉球沖縄語伊平屋島方言(表1)は、人間名詞で-*taa*と-*nčaa*の2つが使われる。このような場合、複数形式の意味に着目することが有効である可能性がある。特に、「複数のX」からなる集合を示す累加複数(例: 弟たち=全員が弟の集団)と、「Xとその仲間」からなる集合を示す連合複数(例: 弟たち=弟とその友人)の区別は重要である(新永2020)。上記の伊平屋島方言の場合、一部の人間名詞における-*taa*と-*nčaa*の区別にはこの連合・累加の区別が関与しているという(Carlino 2022)。他にも、特に日琉諸方言に広くみられる興味深い意味的区別として、本研究が仮に「慣例集団化」と呼ぶものがある。青森県野辺地方言を含む東北方言には身内・仲間の集団を示す-*ho* (*ora-ho*「俺たち(=俺を含む家族/仲間/友達/グループ)」)があり、それは連合複数的一种とも言えそうだが、この方言には-*ora-do*「俺たち」という連合複数の形式があり、これらの違いについて詳細な分析はまだなされていない。

**観点4: 複数標示以外の機能の有無** 標準語の「～たち」と同様に、さまざまな名詞に同一の複数接辞が使われる方言に関しても、標準語と違った使われ方がみられることがある。関西方言の複数接辞-raは標準語と違って無生物にも自由につき、その場合の意味は複数ではなく「～など」という例示(similative)を表す(例: *yasai-ra*「野菜など」; 上林2017)。この特徴は地理・系統的に大きく離れた南琉球八重山白保方言でも観察され、-*nda*は無生物名詞につくと、純粋な複数を表す場合と例示を表す場合がある。複数という意味カテゴリーと例示という意味カテゴリーの近接性を示す理論的にも重要な実証データである。しかし、日琉諸方言でこの点に着目した研究は上代奈良方言に関する小柳(2006)と奄美大島の湯湾方言に関する新永(2020)のみであり、進んでいない。

## (2) 本研究の目的および学術的独自性と創造性

本研究の目的は、フィールド調査による一次データに基づき、上記の観点1から4に基づき方言間バリエーションを記述し、多角的な通方言比較を行うことである。異なる観点間の関係にも注意し、これまでにない体系横断的で重層的な数カテゴリーの通方言的研究を示す。

本研究の独創的な点は、まず数カテゴリーに関する通方言的研究として日本で初めての共同研究であるという点である。【概要】で触れたアクセント研究やテンス・アスペクト・モダリティ研究、格標示の研究に並ぶ大規模な通方言的比較研究であり、本研究で示す方言

## 【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

間バリエーションの多角的な記述と、それらの比較の枠組みは、今後、個別方言の数カテゴリーの記述を行う際の重要な基盤になると予測される。

次に、個別の観点に関する独創性もある。例えば**観点2(名詞の語彙的タイプ)**に関して、これまでの個別方言の記述では、ある方言に2つ以上の数標示の方法がある場合、名詞句階層（1人称>2人称>3人称>固有名詞>人間>動物>無生物）によって分布を試みる研究が大半を占めていたが（下地2018），本研究ではこれを批判的に再検討することから始める。表1で見たように多くの方言で疑問名詞「誰」の複数形が存在するが、名詞句階層に疑問名詞の固有の位置はなく、これにどう位置付けてよいか不明である。また、琉球諸語の中には1人称複数に除外（聞き手を排除）と包括（聞き手を包含）の区別があるが、名詞句階層ではどちらも1人称であって、区別できない。さらに、日琉諸方言の多くで極めて重要な名詞の語彙区分として呼称詞（呼びかけが可能な名詞：固有名詞，目上の親族名称，「先生」のような地位名詞）があり，これは数標示を考える上で有効だが（Shimoji 2022），名詞句階層にこのまとまりを示す領域はない。呼称詞は名詞句階層の固有名詞と人間名詞にまたがるカテゴリーである。本研究では，日琉諸方言の複数表現を名詞句階層に頼らずに適切に記述し，また通方言的比較をより効果的に行えるモデルを模索する。

本研究の独創性の3点目は，記述と理論のバランスにある。本研究では，比較の元となる個別方言における数カテゴリーの丁寧な記述を重視し，他方で一般言語学の数カテゴリーの研究成果を十分に検討しながら研究を進める。このバランスは本研究のメンバー選定に表れている。本研究の分担者全員が個別方言の記述の経験と実績を有し，そのうち2人は海外で学位をとった理論言語学（形式意味論）の専門家でもある。

## (3) 本研究の着想に至った経緯や、関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

日琉諸方言の消滅危機が注目され始めた2000年代以降，日琉諸方言の体系的記述研究，すなわち個々の方言を1つの独立した言語体系と捉え，その音韻と文法を詳細にまとめた記述文法の作成が急速に進みつつある。この10年ほどの間で，琉球諸語を皮切りに本土方言も含め重要な成果が次々に出始めている(下地2021)。体系的記述の蓄積は，これまでにない新たな方言研究を可能にした。それが，本研究が目指すような，個々の方言の体系的記述の成果と体系的記述を行う研究者のネットワークを用いた**文法体系の通方言的比較**である。この新しい方言研究は，個別方言の体系記述の進展に合わせるように，特に2010年以降に目立つようになり，格（木部・竹内・下地編2022），情報構造（竹内・下地編2019），テンス・アスペクト・モダリティ（工藤2014）など，いくつかの重要な成果が出ている。本研究で扱う数カテゴリーもまた，格や情報構造，TAMなどと同じくらい方言間バリエーションが目立ち，またどの方言の文法体系においても無視できない重要な位置を占めるが，日琉諸方言全体を視野に入れた大規模な通方言比較はこれまで全くなかった。

この5年ほどの間で，本研究の研究メンバーとして名を連ねる研究者たちが，それぞれ独自に数カテゴリーに関する個別方言の記述研究や通方言的研究を次々に発表し（上林2017，新永2020，下地2018，Shimoji 2022など），また学会でのワークショップ（2022年日本語学会春季大会ワークショップゼロ「日本語の時空間変異における複数形の多義」新永悠人・上林葵・平塚雄亮）を開催するなどして，当該テーマを共同研究の形で行う素地が整ってきた。申請者はこの背景を踏まえ，本研究を行う機が熟したと考え，本研究を企画するに至った。

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

(4) 本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

本研究では、地理・方言区画・系統のバランスを考えた日琉17方言を対象にする。研究代表者及び分担者は、対象方言それぞれの体系を深く理解する専門家であり、また現時点で協力を確約している研究協力者も当該地域（図1の灰色地点）の専門家である。これらの研究者による個々の方言のしっかりした記述をベースに通方言的比較を行うことで、数標示に用いられる手段をもれなく報告でき、その使い分けについてこれまでの調査経験やデータに基づいて適切な仮説を提示して検証することができる。

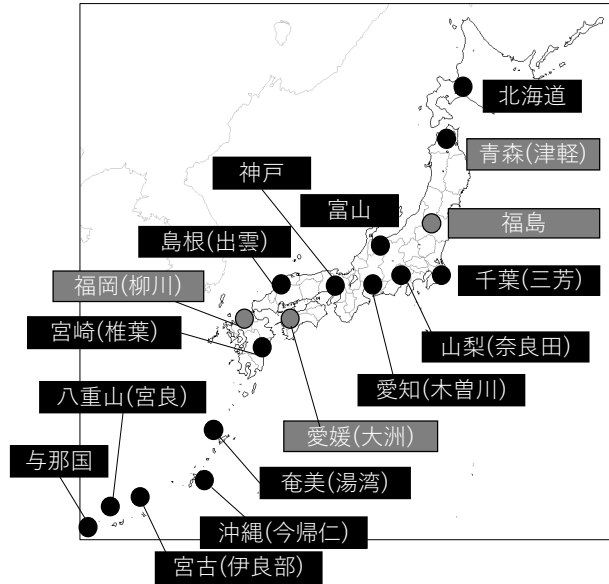


図1. 本研究で扱う方言

p. 2で挙げた4つの観点に関して、どこまで明らかにすべきかを述べる。観点1（複数形式の形成手段）に関して、接辞法、重複法などの形態的手段に加えて韻律的手段（アクセント移動；Kibe, Oshima and Yamada 2018）も報告がある。よって本研究でも形態統語的な手段と韻律的手段の双方を視野に入れる。

観点2（名詞の語彙的タイプ）に関して、p.3で指摘したように、名詞句階層（1人称 > 2人称 > 3人称 > 固有名詞 > 人間 > 動物 > 無生物）は日琉諸方言の個々の方言における多様な複数表現の整理において限界がある。それを実証的に確かめ、代替的なモデルが提案可能かを探るまでが本研究の目標である。なお、代替モデルの素案は既に申請者が提案しており（下地2018），これをたたき台にして、本研究でその有効性の確認と修正をおこなっていく。代替モデルは、名詞句階層のような1次元の（線形の）モデルではなく、図2に示すような2次元の（面の）モデルであり、名詞句階層では扱えなかった1人称複数の除外・包括の区別、疑問名詞、呼称詞を明確に位置付けている。名詞の語彙タイプを、地図の中の「地点」のように考えて、ある複数形式がどの領域までカバーできるかを視覚的に表現できるようになっている。このモデルを使うと、名詞句階層モデルではうまくパターンを捉えられない方言にもうまく対応できる。例えば、表1の八丈島三根方言に対して名詞句階層モデルを使うと、-raraという複数接辞は2人称代名詞から下位の名詞にかけて使えるように見えるが、その一般化は不可能である。呼称詞（名詞句階層では固有名詞や親族名詞に相当）を飛び越えて下位に分布するからである。

しかも、名詞句階層に存在しない疑問名詞にも分布する。一方、2次元モデルを使えばこのような問題を回避できる。なお、このモデルでは、地点間に線（「道路」）が引かれている場合のみ、その

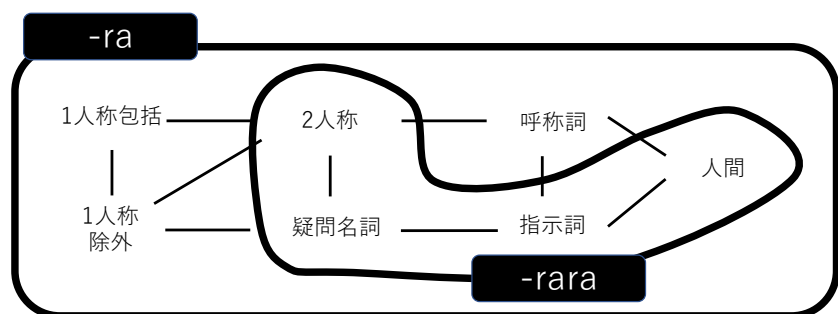


図2. 八丈島三根方言の複数表現と名詞の語彙タイプ

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

線を經由してカバーする領域を拡大できる。これにより、例えば2人称と3人称（指示詞）が同じ複数形式をとる方言は、必ず疑問名詞か呼称詞もまた同じ形式をとることが予測され、なぜそのような近接性が観察されるかが研究課題となる。それを考えるのが本研究である。

**観点3（複数性の意味特徴）**に関して、累加複数と連合複数に対する形式的区別が有るかどうかを各方言において調査する。また、琉球語学で指摘される「ウチ・ソト」の概念や、形式意味論の専門家から指摘されている日本語のハダカ名詞と複数形の使い分け（Tomioaka 2021）も視野に入れ、上記2種の複数性の区別を洗練させることも目指す。

**観点4（複数性以外の機能の有無）**に関しては、複数形が表す複数性以外の意味としては通言語的なデータに基づく意味地図を用いた研究によって、「集合的例示（Xなど）」、「単独的or否定的例示（Xなんか（～できない, etc.）」、「尊敬」、「選言的例示（Xか）」の4種類の存在が本研究の研究分担者によって提案されており、特に日琉諸方言ではそのうちの「集合的例示」と「単独的or否定的例示」を表す方言の存在が確認されている（新永 2020；図3）。従来の日琉諸語の研究で「例示」と呼ばれるものは、このうちの集合的例示と否定的or単独的例示の区別をしていないか、さらには連合複数との明確な区別を行っていない場合もあるため、本研究では日琉諸方言の各複数標識がこれらの諸機能をどこまで表せるかを明らかにする。

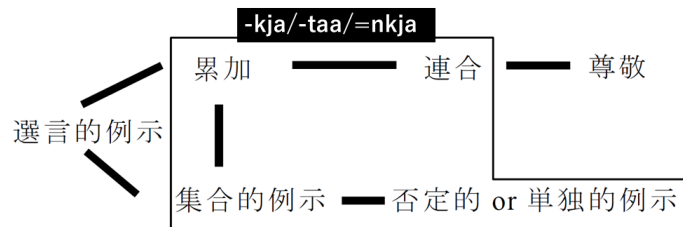


図3. 意味地図モデルによる湯湾方言における複数形式の意味機能

最後に、上記の**観点2から観点4まで**を統合する研究として、図2で示す名詞の語彙タイプと図3の複数形の諸機能（累加、連合、集合的例示など）の関連をも明らかにする。例えば、当該複数標識が累加複数を表す場合には図2のどの範囲まで表すことができるのか、当該複数標識が集合的例示を表す場合には図3のどの範囲まで表すことができるのか、などを共通の調査票を用いることによって明らかにする。

本研究は3年計画である。1年目の現地調査で**観点1**を中心に形式面の洗い出しを行い、**観点2**の整理を開始する。2年目で**観点3と4**を中心に研究を進め、3年目は補完調査を行いながら通方言的比較の枠組みを全員で議論し、成果のまとめに入る。

(5) 本研究の目的を達成するための準備状況

申請者は、日琉諸方言の数カテゴリーに関する概説をすでに執筆しており（Shimoji 2022）、その際に大規模な文献レビューを行ったことから、本研究に関連する主要な研究成果及び問題点をすでに把握している。さらに、図2で紹介した二次元モデルの提案も行っている（下地 2018）。分担者の新永氏は、**観点3、4**で重要な意味地図モデル（図3）を提案しており（新永 2020）、この点について本研究の理論面でのリーダーシップを取る。他の分担者は、次ページに述べるように担当地域・方言の専門家として体系的な記述研究を行っており、本研究で数カテゴリーに焦点を絞って研究する際、当該方言の事情に合わせた適切な調査項目の設定を行うことができる。**観点3、4**を考える上で重要な複数性の意味論的観点について、分担者の[ ]氏は意味論の専門家として本研究の重要なアドバイザー的役割を担う。

## 2 応募者の研究遂行能力及び研究環境

応募者（研究代表者、研究分担者）の研究計画の実行可能性を示すため、(1)これまでの研究活動、(2)研究環境（研究遂行に必要な研究施設・設備・研究資料等を含む）について2頁以内で記述すること。

「(1)これまでの研究活動」の記述には、研究活動を中断していた期間がある場合にはその説明などを含めてもよい。

### (1) これまでの研究活動（文献情報は次ページ）

本研究が考察対象とする17方言のうち13方言（図1の黒色の地点）は、研究分担者が体系的記述を継続的に進める地域であり、本研究の前提となる個別方言の数カテゴリーの記述について、経験を積んだ当該方言の専門家が担当することになる。[ ]方言を担当する[ ]氏はそれぞれの方言、及び周辺方言に関する長年の記述の経験がある（[ ]）。[ ]方言を担当する[ ]氏もまた、それぞれの方言の記述の成果を多数有し（[ ]）、とりわけ[ ]方言については、本土方言でも数少ない本格的な記述文法書を作成している（[ ]）。[ ]方言を担当する[ ]氏は、当該方言の記述の成果（[ ]）に加え、アクセント研究の専門家として、p.4の中段で述べた韻律的な手段による数標示に関しても重要なアドバイザーとなる。[ ]方言を担当する[ ]氏は、[ ]方言の文法記述（[ ]）を進めつつ、複数標識-raの例示用法に関する論考を発表するなど（[ ]）、方言の数カテゴリーに関する研究を積極的に進めている研究者である。宮崎椎葉方言、北琉球沖縄語今帰仁方言、南琉球宮古語伊良部方言を担当する下地理則（研究代表者）は、それぞれの方言に関する記述研究の成果(Shimoji 2008, Shimoji and Hirose 2022, 下地2022)に加え、数カテゴリーに関する国際ハンドブックの日琉諸方言の章を担当した実績があり(Shimoji 2022)、本研究全体を統括する上で必要な数カテゴリー全般に関する記述方言学的・一般言語学的な概要の把握を済ませている。また、本研究の観点2を考える上で重要な、名詞句階層に対する代替モデルの素案を提案している(下地2018)。[ ]方言を担当する[ ]氏は、当該方言の記述の成果（[ ]）に加えて、複数標示の意味特徴に関する研究を積極的に発表しており（[ ]）、最新の論考（[ ]）は本研究の観点3, 4を具体的に考察していく際に最重要文献である。[ ]方言を担当する[ ]氏は、当該方言の記述の成果（[ ]）に加えて、本研究で極めて重要な複数性の意味論的な議論に関して理論的なアドバイスを行える形式意味論の専門家である。数に関する理論的な成果もある（[ ]）。[ ]語を担当する[ ]氏は、当該方言の記述の成果（[ ]）を有するフィールドワーカーであることに加えて、上記の[ ]氏と同様に形式意味論の専門家でもある。[ ]氏と共に本研究における理論面でのアドバイザーとしての役割が期待される。

### (2) 研究環境（研究遂行に必要な研究施設・設備・研究資料等を含む）

本研究は現地調査を主要なデータ収集の手段としているため、特殊な研究施設は必要ない。研究遂行に必要な設備は本研究の予算で獲得する録音機材、ノートパソコンなどを指す。なお、コロナ禍によって現地調査が一時かなり制限されていたが、申請者を含め、去年から通常の現地調査を開始できるようになっていると感じる研究者が多い。よって、常識的な感染対策を施した上での現地調査は十分に可能である。

【2 応募者の研究遂行能力及び研究環境（つづき）】

これまでの引用文献一覧（アルファベット順）

- Carlino, Salvatore (2022)** Iheya. In Shimoji, Michinori, ed., *An Introduction to the Japonic Languages*, Brill/**Davis, Christopher (2015)** Plurality and distributivity in Yaeyaman wh-questions. In D'Antonio, Sarah, Mary Moroney and Carol-Rose Little, eds., *Semantics and Linguistic Theory (SALT) 25*, 636–655. /**デイビスクリストファー(2017)** 「八重山語・宮良言葉:記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述」『危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』、137–144. /**Davis, Christopher, and Tyler Lau (2015)** Tense, aspect, and mood in Miyara Yaeyaman. In Patrick Heinrich, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji, eds., *Handbook of the Ryukyuan Languages*, 253–298/平子達也・久保蘭愛・山口響史 (2019) 「木曾川方言文法概説」青井隼人・木部暢子（編）『愛知県木曾川方言調査報告書』（国立国語研究所）7-70./**Hirako, Tatsuya (2022)** Izumo (West Japanese). In Shimoji, Michinori, ed., *An Introduction to the Japonic Languages*, Brill/**上林葵 (2017)** 「関西方言における接尾辞「ラ」」『阪大社会言語学研究ノート』15, pp.59-71/**上林葵 (2019)** 「関西方言における終助詞的断定辞「ジャ」の機能—マイナス感情・評価の提示—」『日本語の研究』15-2, pp.1-17/**Kibe, Nobuko, Hajime Oshima and Masahiro Yamada (2018)** Plural Forms in Yoron-Ryukyuan and Address Nouns in Ryukyuan Languages. *Japanese/Korean Linguistics* 25: 1-11/**木部暢子・竹内史郎・下地理則編(2022)**『日本語の格表現』くろしお出版/**工藤真由美(2014)**『現代日本語のムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房/**小西いずみ (2016)**『富山県方言の文法』ひつじ書房/**小西いずみ・三樹陽介・吉田雅子 (2022)** 「山梨県早川町奈良田」セリック ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一（編）『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』（国立国語研究所） pp. 77-150./**小柳智一(2006)**「上代の複数：接尾語ラを中心に」『萬葉』196: 35-51/**三樹陽介(2018)**「八丈語三根方言の人称・指示代名詞の複数と階層性」日本言語学会 156 回大会予稿集/**Nakagawa, Natsuko (2022)** Nambu. In Shimoji, Michinori, ed., *An introduction to the Japonic languages*, Brill. /**新永悠人(2016)**「北琉球奄美大島湯湾方言の複数または例示を表す kja と nkja の形式的分析」『成城国文学』32: 57-46/**新永悠人(2020)**「北琉球奄美大島湯湾方言の名詞・代名詞複数形の機能とその通言語的な位置づけ」『言語研究』157: 71-112./**Niinaga, Yuto (2014)** A grammar of Yuwan, a northern Ryukyuan language. PhD thesis, University of Tokyo/**佐々木冠 (2004)**『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版/**Sasaki, Kan (2015)** Non-universality of reflexive analysis for anticausativization: Evidence from the Hokkaido dialect of Japanese.『札幌学院大学総合研究所紀要』2: 7-29/**佐々木冠 (2022)** 「千葉県南房総市三芳地区」セリック・ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一編『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』37-76, 国立国語研究所/**Shimoji, Michinori (2008)** A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language. PhD thesis, Australian National University./**下地理則(2018)**「日琉諸方言における複数標示のパターンと類型化」日本方言研究会発表予稿集/**下地理則(2021)**「グラマーライティング：方言の記述文法を書くガイド」『日本語文法』21(2): 136-152/**Shimoji, Michinori (2022)** Number in Japonic Family. In Acquaviva and Daniel, eds., *Number in the World's Languages*, Mouton./**Shimoji, Michinori, and Naoyuki Hirose (2022)** Shiiba. In Shimoji, Michinori, ed., *An introduction to the Japonic languages*, Brill./**竹内史郎・下地理則編(2019)**『日本語の格標示と分裂自動詞性』くろしお出版/**Tomioka, Satoshi (2021)** Japanese -tati and generalized associative plurals. In Patricia Cabredo Hofherr and Jenny Doetjes, eds., *The Oxford handbook of grammatical number*. Oxford: OUP/**占部由子(2022)**「南琉球八重山語石垣白保方言の記述研究」博士論文, 九州大学/**Yamada, Masahiro, Thomas Pellard and Michinori Shimoji (2015)** Dunan grammar. In Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of Ryukyuan Languages*. Mouton./**横山晶子(2017)**「北琉球沖永良部国頭方言の文法」博士論文, 一橋大学.



### 3 人権の保護及び法令等の遵守への対応（公募要領4頁参照）

本研究を遂行するに当たって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など指針・法令等（国際共同研究を行う国・地域の指針・法令等を含む）に基づく手続が必要な研究が含まれている場合、講じる対策と措置を、1頁以内で記述すること。

個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査・行動調査（個人履歴・映像を含む）、提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、遺伝子組換え実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続が必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

該当しない場合には、その旨記述すること。

本研究では、個人情報の提示を伴う調査を行う必要がある。すなわち、録音する言語データのそれぞれについて、話者の名前・年齢・性別・出身地・両親の出身地などをメタデータとして記録する必要がある。日琉諸方言は消滅危機言語であることから、他の研究者の利用・現地コミュニティでの利用を見越して録音した言語データを公開する必要もある。申請者はすでにこうした倫理的な問題を書面（コンセントフォーム）による契約という形式でクリアした経験があり、本研究でも、話者と申請者との間の契約という形式で書面を作成し、話者との同意を確保する。さらに、録音される内容についても、たとえば個人名が混じった談話を録音していたこととあとで気づくこともある。その際は、録音データの当該部分を削除編集し、文字化したデータにはその個人名の部分にxなどの不特定名称を施すようにする。



**4 研究計画最終年度前年度応募を行う場合の記述事項（該当者は必ず記述すること（公募要領27頁参照））**

本研究の研究代表者が行っている、令和5(2023)年度が最終年度に当たる継続研究課題の当初研究計画、その研究によって得られた新たな知見等の研究成果を記述するとともに、当該研究の進展を踏まえ、本研究を前年度応募する理由（研究の展開状況、経費の必要性等）を1頁以内で記述すること。  
 該当しない場合は記述欄を削除することなく、空欄のまま提出すること。

研究種目名	課題番号	研究課題名	研究期間
			平成 年 度～令和 5年度

**当初研究計画及び研究成果**

**前年度応募する理由**